

昨年夏、新里村板橋の会社経営、金谷透さん(52)ら8人が、台湾を南北に貫く中央山脈の最高峰、玉山(ぎょくさん、3997m)の登頂を果たした。「健常者と障害者が気軽に交流できる共生社会を目指す」(金谷さん)のが目的で、8人のうち3人は、軽度の知的障害を持つ若者だ。金谷さんが経営するソーセージ製造会社で働く2人と、登山計画を本紙報道で知り応募してきた1人が、健常者とともに山登りという共同作業を体験した。登山を通じ、それぞれが何を考えたのか。どんな関係が生まれたのだろうか。「貴重な体験を記録として残しておきたい」と話す金谷さんの手記を紹介する。



登山前に宿舎で酒を酌(く)み交わす参加者

共生目指して 台湾・玉山登山行

▷上

ボランティア業界人の思想と行動に毒されている私には、この良好な関係を壊さないために、旅行中、口出しを控えねばならない、と感じた。

台湾初日、台北では山岳ガイドの林(りん)さんが、わずらわしい登山用を済ませておいてくれたので、彼の運転でゆっくり台中など

東埔温泉は深くて狭い谷間にある温泉宿である。われわれはここで前祝いと称して少しせいたくな夕食をとった。酒仙の前沢さんに勧められるまま、老酒を飲んだ内田君が酔ってつぶれてしまった。二十一歳の彼にとっては、成人式より確かな、大人の世界への通過儀礼であった。

昨年夏、わが社の知的障害者を持つ若い従業員、鶴沢君と内田君を誘って台湾の最高峰、玉山への登山計画を立てた。この計画を上毛新聞などで知った山好きが集まり、登山隊は鶴沢、内田両君を含む知的障害者三人と壮年組五人の総勢八人にふくらんだ。皆これまで、いわゆるボランティア業界とは無縁だった。そのため、知的障害者を目の言質に従わせ、思惑通り動かすことに慣れていない。その結果、従来の「健常者に障害者が命じられ

最高峰へと心一つに

翌日の登山一日目は快晴。早朝に宿を出て

る」一方通行の形ではなく、障害者側からも「たすね、提案し、相談する」という相互通行の対話が築かれた。健常者も彼らとの対話をいとわずに繰り返し、会話を楽しんでいったようだった。

を經由し、登山基地の東埔(とうぷ)温泉に向かった。期せずして、台湾(台湾)の最激震地を通過していた。震源地となった東埔(とうぷ)では、日本の植民地時代の駅舎が残っており、展示館になっていた。

登山口に向かう。従来の登山口である塔々加(たあか)か(鞍部(二六〇〇))まで車が入れず、アスファルト道を五(ご)歩(ふ)かされた。登山口からは緩いこう配の快適な道を進んだ。

集う

(金谷透)